

## 121. 昭和58年度 県指定文化財の紹介

### その2

#### 彫刻

1. 木造聖観音立像 1 軀 (鎌倉時代)  
草津市芦浦町 観音寺

像高 100.0cm

高髻を結び、天冠台上に花冠を表す。花冠正面に化仏立像を刻出する。地髪は正面がまばら彫り、背面を平彫りとする。耳朵環状、三道を表す。条帛、裳、腰布、天衣をまとい、左腕を屈臂して腹前で蓮華を持ち、右手をこれに添え、両足を揃えて四重蓮華座上に直立する。

(説明) 条帛、裳、天衣をまとい、腹前で蓮華を握り、右手を添えて直立する通形の聖観音像であるが、頭上の花冠の正面に観音の標識である化仏立像を浮彫りで表すところや、すらっとした体つきで、腰布を膝のあたりまで長くまとうところなどは本像の特徴である。桧の寄木造りからなり、白毫、髪、眉、目などに彩色を施す以外は素地のままで、いわゆる檀像風の作品である。目を彫眼とし、着衣の衣文の彫りは浅く、平安時代末期ころの気分をたたえている。しかし、切れ長の目には鋭さが表され、鎌倉的な顔つきになっていることも見逃せない。像背面の墨書から、建暦3年(1213)10月に、高向昌平という人物が願主となり、佛師僧妙尊によって造像されたことが判明することから、13世紀初頭における基準作例として注目される。



木造聖観音立像

観音寺

2. 木造如意輪観音坐像 1 軀 (鎌倉時代)  
附 木造吉祥天立像 1 軀

栗太郡栗東町大字井上 井上区

○如意輪観音 総高(光背を除く) 12.5cm

像高 6.0cm

高髻を結び、天冠台を表し、髪に毛筋を彫る。両耳に巻毛をかけ、三道を刻む。条帛、天衣、裳、腰布をつけ、頭部を右に傾けて、右膝を立てて坐す。六臂の如意輪観音像であるが、三臂を欠く。左第一手は岩上につき、第二手は肩より欠け、第三手は前膊半ばより欠失する。右手の第一手は右頬に甲を添え、臂を膝頭につける。第二手は右方に垂下して持物をとる形を表し右第三手は臂前から欠失する。胸に胸飾りを、腕に臂釧、腕釧を刻出する。

台座は、框座の上に岩をのせ、反花、敷茄子、受座、蓮肉(蓮弁つき)を重ねる。像の背に舟形光背を表す。

○吉祥天 像高 68.5cm

髪を両肩に垂らし、唐服をまとい、右手を下げ、左手を上げて、持物をとる形で、省をはいて直立する。



木造如意輪観音坐像 井上区

像背面腰上に方形の孔をあけ、中に棚板を設けて、如意輪観音像を安置する。

(説明) 像は、高髻を結び、頭部を右に傾け、右膝を立てて坐す。六臂の如意輪観音で、木造吉祥天立像の胎内仏である。頭体を通し、連肉を含めて、櫃のような緻密な材で彫成し、髪や唇など、頭部の一部に彩色を施す以外は、素木のままの仕上げとする、いわゆる檀像風の作技を示し、細部まで入念に彫出している。岩座の上に蓮華座をのせ、金銅透彫光背も備えた本格的な仏像で、小像ながら極めて精緻な作品である。

台座反花裏面の墨書から、正応4年(1291)8月に、沙門琳賢が願主となり、仏子定圓によって造像されたことが知られ、台座裏面にも、嘉元年間、ある仏像の胎内に本像を納入したことを窺わせる墨書があることから、早くから注目されてきた像である。

ところで、吉祥天立像は、桧の一本割削造りからなり、大きく内削りを施す像である。背面上部に方形の孔をあけ、蓋板を当て、像内腰部に小判形の棚板を水平にはめ込んでいる。このたび、この棚板の裏面にも墨書のあることが発見され、如意輪観音は、造像されてから15年後の、嘉元4年(1306)9月25日に、琳賢らの手によって吉祥天立像の胎内に納められたことが明確となった。

如意輪観音像を、なぜ、吉祥天立像の胎内に納入したのか、その理由は明らかではないが、鎌倉時代における如意輪観音像の基準作例として貴重であり、輔仏吉祥天立像とともに永く保存を図る必要がある。

### 3. 木造聖観音立像 1軀 (鎌倉時代)

愛知郡秦荘町大字岩倉 仏心寺

像高 105.3cm

○本軀 高髻を結び、天冠台を彫出し、地髪はまばら彫りとす。両耳の上から天冠帯を垂下させる。目は彫眼、耳朶は環状につくり、三道を表す。天衣は肩から左右前膊に少しかかり垂下し、条帛、裳(折返し付き)、腰布をまと。両手を屈臂し、左手は腹前で蓮華茎を握り、右は胸前で第一・二指を捻じ、蓮華に添える。腰をわずかに左にひねり、両足を揃えて立つ。

○光背 舟形光背。光脚に五弁を薄く浮彫りで表す。身光部圏帯を線刻と墨描で、頭光は墨描で表し、周縁部には唐草等を墨描で表す。

(説明) うず高く髻を結び、天冠台を彫出し、左手に蓮華の茎を握り、右手は蓮華に添える。天衣、条帛、裳、腰布をまと、腰を少し左にひねって立つ通形の聖観音像である。頭体を通して、桧の一枚で彫成し、腕を肩と臂で削付ける一本造りの構造で、内削りはない。髪や顔の一部に彩色を施すほかは、素地仕上げとする、いわゆる檀像風の彫像である。下半身が長く、すらっとした体つきで、なで肩であるところや、衣文

の彫りも浅く、穏やかに仕上げられているところ、目を彫眼とするとところも古様で、藤原彫刻に通じるものがある。

本像の舟形光背の裏面の墨書から、貞応元年(1222)9月に勸進僧良真、仏師近江講師経圓によって造像されたことが明らかとなり鎌倉時代前期における基準作例として貴重である。

## 工 芸 品

### 1. 鑄 口 (所在水観寺) 1口 (鎌倉時代)

大津市園城寺町 園城寺

面径 28.2cm 鑄銅製

肩は薄く、鑄は目立たず、比較的、面の甲盛りも少ない。上方左右に片面式の耳をつくり、鉄製の吊環をつける。撞座は、八葉複弁の蓮華文を鑄出し、連肉に



木造聖観音立像

仏心寺

は8個の蓮子を表す。鼓面は、二条あるいは三条の太い紐により撞座区、内区、外区に分ける。

(説明) 園城寺五別所の一つ、水観寺の本堂に懸けられてきた鰐口である。表面に緑青がふき、やや小形ながら鑄技の優れたもので、面径に比べ肩の厚みの少ないこと、鑄が目立たないこと、甲盛りが少ないところなどに特徴がある。内外区を分ける紐や中央に据えた撞座の形も整い、典型的な鎌倉時代の製作と認められる。慶長13年(1608)の刻銘から、水観寺本堂の再建に係わる鰐口であることが知られ、資料的にも貴重である。

2. 鰐口 1口 (鎌倉時代)

甲賀郡甲西町大字正福寺 正福寺

面径 32.7cm 鑄銅製

柔かなふくらみをもつ円形鼓面を両合わせにした形で、肩幅は厚い。上方左右に耳をつくり、下部は側面の中ほどまで大きく裂け、縁を唇状にし、その両端は丸い穴をつくって目とする。鼓面は、外区、内区、撞座区の3区に分ける。撞座は十二葉複弁の蓮華文を鑄出する。両面とも文様は同一。

(説明) 肩は厚く、面に甲盛りが付き、形姿のよい鰐口である。撞座に十二葉蓮華文を鑄出しているが、かなり使い込まれている。銘帯の陰刻銘から栗東町の小野寺(廃寺)に伝わったものであることが知られ、鎌倉時代における数少ない基準作例として、また資料的にも貴重である。

3. 金銅密教法具 (鎌倉時代)

火舎 1口 六器 7口 羯磨 3口  
 独鈷鈴 1口 宝珠鈴 1口 塔鈴 1口  
 独鈷杵 1口 三鈷杵 1口 宝珠杵 1口

大上郡甲良町大字池寺 西明寺

○火舎 総高 6.9cm

蓋を欠失しているが、やや低い甗に鑄を付し、身(火炉)にも鑄をつける。底縁には二条の紐をめぐらし、三方に鑄だった猫足を止める。挽物仕上げ。底に「西明寺」の陰刻銘がある。

○六器 甗高 4.3cm 台皿高 1.6cm

甗はやや厚手で、腰が張り、低い高台を付す。台皿は中央に鑄うけを一条設け、裾広がりの低い高台を付す。甗7口、台皿6口が現存するが、いずれの底にも「西明寺」の陰刻銘がある。

○羯磨 長径 13.1~13.3cm

中央の鬼目は周囲に八葉の蓮弁をめぐらし、三鈷の基部も蓮弁と裳で飾る。三鈷の両脇鈷は、節に牙状の逆刺をつくりだす。羯磨台はない。表裏は同一の文様。

○独鈷鈴 総高 21.3cm

鈴身は、肩が丸くなだらからで裾が開く。胴の上下に



鰐口 園城寺



鰐口 正福寺

三条子持ち紐、二条の紐をめぐらしている。鈴身の上面は把の二条紐から伏蓮を表す。把は中央に4個の鬼目をめぐらし、上部は蓮把を二条紐で締める。頭部に独鈷を表す。把から上と鈴は別鑄。鈴の内側に金銅舌を付す。鈴の口縁底部に「西明寺」の陰刻がある。

○宝珠鈴 総高 21.6cm

頭部に四方火焰をたてた宝珠を据えるほかは独鈷鈴と同様。

○塔鈴 総高 24.5cm

頭部に宝珠つき相輪を立てた宝塔を鑄出する。他は独鈷鈴と同様。

○独鈷杵 総長 18.1cm

把は中央に4個の鬼目をめぐらし、上下に二条の紐で締めた蓮把を表す。さらに両端に独鈷を表す。

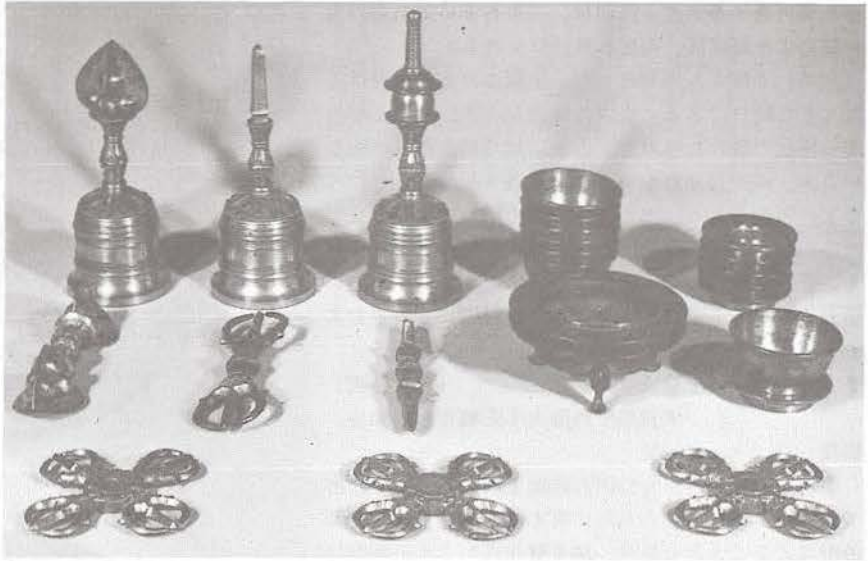
○三鈷杵 総長 18.1cm

把は独鈷杵と同様であるが、やや平たい。両端に逆刺のついた三鈷を表す。鬼目4個。

○宝珠杵 総長 18.6cm

把は独鈷杵と同様で、両端に三方火焰つきの宝珠を表す。鬼目は3個。

(説明) 天台宗、真言宗の寺院において、密教の修法に用いる道具を密教法具という。西明寺の密教法具は、火舎、六器、羯磨、金剛鈴、金剛杵など9種23点を数える。いずれも、鑄銅製で鍍金を施しており、意匠、形姿とも優れ、技巧も精緻であるところから鎌倉時代の作と考えられる。多少散逸したものもあるが、県内にこれだけの種類を一括して伝存するもの珍しい。



密教法具

西明寺

4. 唐櫃 2合

(南北朝時代)

犬上郡甲良町大字池寺 西明寺

その1 総高 32.8cm その2 総高 32.5cm

桧材。長方形、被蓋造り、六脚つきの櫃で、外側は、紅殻で色付けし、その上に透漆を塗る。内側は黒漆塗。稜は1mmほど削って布張を施し、黒漆を塗る。短側面の脚の上部に紐を通すための孔をうがつ。

(説明) 唐櫃は、辛櫃、韓櫃とも書き、中国から渡来した形式の櫃で、衣料や調度類などを入れるのに用いられてきた。

西明寺の唐櫃は、桧の一枚板を組合わせて長方形の箱をつくり、蓋を被せ、身の長側面に各2本、短側面に各1本の、6本の脚をつけたものである。表面は紅殻で色付けした上に透漆を塗り、内側は黒漆塗りとする。蓋表と底裏の墨書、あるいは、側面に刻した薬研彫りの銘から、観応元年(1350)10月に、西明寺の灌頂



唐櫃

仏具を納めるために作られたことが判明する。

簡素な唐櫃であるが、制作年代と使用目的を明らかにする基準作として貴重である。また、唐櫃の遺例は全国的にみても数が少ないことから、資料的価値も高い。

5. 金銅錫杖頭 1柄

(平安時代)

犬上郡甲良町大字池寺 西明寺

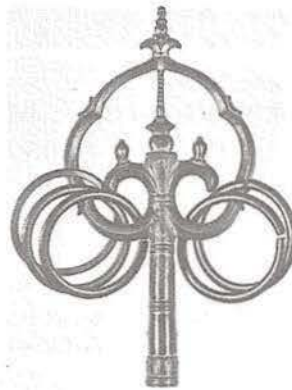
総高 17.9cm 鑄銅製。鍍金

輪は左右四ヶ所に三日月形の四王座を設ける。左右の弦は中央部に曲り込み、蕨手形に開き、上部に宝瓶形を据え、中央に相輪を付した宝塔を飾る。輪頂には五輪塔を安置している。柄部は二条紐と蓮華で飾る。遊環5個付き。

(説明) 鑄銅製で、鍍金の施された錫杖頭である。頂輪に五輪塔を安置し、輪は、左右4ヶ所に括りをつくらせて五花形とする。その下端は内に巻き込んで、上部に宝瓶を据える。また、竹竿形につくった柄の頂部には蓮華座上に宝塔を飾り、相輪が輪頂に連なっている。

五花形の輪はのびのびとした素直さがあり、五輪塔や宝塔、蓮華文なども、繊細優美であるところから、制作は平安時代も後期を下らぬものと考えられ、本県における現存最古の遺例として貴重である。

五花形の輪はのびのびとした素直さがあり、五輪塔や宝塔、蓮華文なども、繊細優美であるところから、制作は平安時代も後期を下らぬものと考えられ、本県における現存最古の遺例として貴重である。



金銅錫杖頭